

慶應義塾大学東アジア研究所 ニューズレター

No.9 March 2008

2007年度二十二回目を迎えた学術大会

Contents

学術大会	1
シンポジウム	10
研究会	12
東アジア研究フェローシップ	13
出版	14

2007年度 第二十二回 学術大会 ●

東アジア研究所第22回学術大会が2007年6月30日(土)午後1時から、東アジア研究所・第一共同研究室において開催された。例年どおり4プロジェクトから昨年度一年間に実施された研究成果の一端が報告され、各々について関連討議がなされた。また今年度から新発足した2プロジェクトに関して、研究計画の概要が紹介された。終了後恒例となったビア・パーティーに移り、懇談の一時を過ごして散会した。

<学術大会プログラム>

13:00 - 13:05 所長挨拶

13:05 - 13:55 プロジェクト報告①

「中国・中小企業研究の新地平―産業発展・制度改革・地域変容の統合的研究―」

(研究代表者 渡辺幸男経済学部教授)

報告者 駒形 哲哉(慶應義塾大学経済学部)

テーマ 「東アジアの産業移転と中国の制度改革―華東自転車産業の事例から―」

13:55 - 14:45 プロジェクト報告②

「東アジア的地平の中の近代日本法政思想―福沢諭吉の再定位を目指して―」

(研究代表者 岩谷十郎法学部教授)

報告者 岩谷 十郎(慶應義塾大学法学部)、
西澤 直子(慶應義塾大学福澤研究センター)

テーマ 「情愛に結ばれる人間関係―福澤における家族論のアジア的地平―」

14:45 - 15:05 コーヒーブレイク

15:05 - 15:55 プロジェクト報告③

「アジア、ラテンアメリカを中心とした地域における、中間組織と多元的市民社会の可能性」

(研究代表者 山本純一環境情報学部教授)

報告者 劉 培峰(北京師範大学法学院)

テーマ 「中国非政府的参与問題(邦訳:中国NGOの(公共事業への)参与問題)」

15:55 - 16:45 プロジェクト報告④

「東アジアにおける宗教文化の再構築」

(研究代表者 鈴木正崇文学部教授)

報告者 野村 伸一(慶應義塾大学文学部)

テーマ 「祭祀儀礼の現場からみた東アジア」

16:45 - 17:15 新プロジェクト紹介⑤・⑥

(発表時間:各15分)

⑤「グローバリゼーションと東アジアの公共観の変貌」

(研究代表者 藤田弘夫文学部教授)

報告者 藤田 弘夫(慶應義塾大学文学部)

⑥「朝鮮半島における秩序変革」

(研究代表者 小此木政夫法学部教授)

報告者 倉田 秀也(杏林大学総合政策学部)

17:20 - 19:30 ビア・パーティー

<発表要旨>

プロジェクト①

駒形 哲哉(慶應義塾大学経済学部)

「東アジアの産業移転と中国の制度改革

—華東自転車産業の事例から—

1980年代半ば以降の為替調整と90年前後の需要構造の変化が自転車産地の構造調整を引き起こし、世界の自転車生産は中国へと集中している。台湾・巨大機械工業の華東進出が台湾系・日系パーツメーカーによるサプライチェーン形成を誘発し、地場完成車メーカーを含めて、中国から日米欧市場への供給を可能にした。ただし、中国の総供給台数の3分の2を占める内外ローエンド市場を占拠しているのは主に大陸の地場メーカーである。

既存国有企業は中国国内市場の需要構造の変化に対応できず、巨大な市場の空間が発生した。そこへ完成車メーカーの参入が認可され、競争が激化した。既存国有企業は、過去の量的拡大の成功経験の上に、意思決定の遅れ、不適切なインセンティブメカニズム、福利厚生負担により業績が悪化した。

巨大で階層性のある市場のビジネスチャンス、天津では国有企業集団の解体から生まれた民営企業群、ビジネス情報に反応した農村企業群が自らのものとし、上海では他産業の発展、地域のサービス経済化により、浙江、江蘇に生産が拡散した。台湾系・日系完成車メーカーでは参入不能の巨大ローエンド市場の存在が、地場メーカーの生産力形成と非日米欧市場への水平的拡張の基礎条件となったことは、他国の産業発展とは異なる特徴として強調されるべきであろう。

1980年代までに全国に広がった中国の国内生産は、90年代以降、華南、華東、華北(天津)に収斂し始めた。その理由は市場と部品供給にあると考えられる。有力国有企業の流通情報の拡散が民営企業の生産を誘発しただけでなく、部品調達ルートの形成(天津)ないし、部品加工能力の存在(浙江)が産地の収斂を決定付けた。

中国の自転車生産の価格競争力は低賃金だけでなく、利用可能な国産設備の徹底的な利用と激しい競争、産業集積の形成によっている。一部では素材からの開発が行われているものの、「開発」の多くは「模倣」的なそれである。地場メーカーの品質的なレベルアップは取引を通じた台湾系・日系の指導、台湾系・日系メーカー出身者の雇用により実現されつつある。

ただし、中国の自転車産業が単に台湾、日本などの自転車産業を追跡ないしこれらにキャッチアップする過程にあり、またその能力をもっているという理解だけでは不十分である。部品から完成車に至るまで低廉に量産する能力を備え、中国に代替しうる地域はすでにほとんどなく、中国は台湾系・日系の調達拠点であり続けるだけでなく、台湾系、日系が参入しえないボリュームゾーンを、内外市場とも中国の地場メーカーが占拠し続ける可能性が高い。

プロジェクト②

岩谷 十郎 君(慶應義塾大学法学部)、

西澤 直子 君(慶應義塾大学福澤研究センター)

「情愛に結ばれる人間関係

—福澤諭吉における家族論の『アジア的地平』

2005と2006の両年度に亘って進めてきた本プロジェクト「東アジア的地平の中の近代日本法政思想—福澤諭吉の再定位を目指して」は、本年度からその成果発表準備のための期間に入った。今回は、共同研究の基盤をなす福澤における家族論の位相と(以下、Iの部分—岩谷執筆)、その内容及び「アジア的素地」について(以下、IIの部分—西澤執筆)、福澤のテキスト内在的な視点から輪郭付けることを試みた。

I. 福澤における家族(論)の位相

福澤の体系的な著述の一つ『文明論之概略』(明治8年)では、文明の太平を招致する条件として「智

-徳の増大」が詳細に論じられる。「智恵(インテレクト)と徳義(モラル)はあたかも人の心を両断して各一方を支配するものなれば、いずれを重しと為しいずれを軽しと為す理なし、二者を兼備するに非ざれば之を十全の人類と云ふ可らず」-福澤は「智」と抱き合わせて「徳」の重要性を主張する姿勢を終生堅持し続ける。

ところでその「徳(義)」とは「情愛の在る処」にこそ働き、その力が十全に発揮されるのはただ家族のみであると福澤は述べていた。「通俗道德論」(明治17年)では、彼は人間の情(人情)が紐帯となる家族・夫婦・親子・朋友を挙げ、これに理(道理)に基づき損益などの合理性を計算した関係としての契約を対置させる。後者の関係性は、その外面(形)的性質から法や規則による統御が及び得るが、前者については、その内面性ゆえに法などの外部からの規制は無効に終わることが多く、ただ「徳(道德)」だけがこれを為し得るとする。ならば、その「徳義」(本稿Ⅱにおける「モラルスタンダード」)の内容はどのように定められるべきか。

「儒教主義」(明治16年)や「徳教之説」(同年)などで福澤は痛烈な儒教批判を展開する。その方法的前提は、情に関わる「徳論」と理に関わる「政論」の分離に置かれたが、これは両者を混淆する儒教への攻撃であった。また既成宗教についても福澤は周到に「徳論」の領域から退けるが、その際にも儒教に触れ、日本の歴史におけるその宗教的機能の薄さを強調した。福澤は古来より日本に展開した道德論を脱儒教的に純化することを強力に推進しようとしたのである。問題はその意図ではなく結果にあった。彼の説く家族道德には、Ⅱで論じるようなアジアの要素の残滓が認められる。

なによりも五倫などの「古聖人の定めた徳教の法則」を「他力の徳心」であると難じる福澤にとっての「道德」とは、「自身の工夫を以て身を修め」「生涯無限の物に接し無限の事に当たりて誤ることなからしむる」(「智徳の独立」明治30年)、いわば「我より働く徳」としての「自力の徳心」として定義される動的な概念であった-独立自尊。「私智私徳」が「公智公德」へと転換する中に人知の文明化の契機を期した福澤にとって、「人情」もまた『「数理」を調査して社会全体の進歩を待つ」処方」の下に置かれた。情-理-徳-智をその定義上厳密に峻別した福澤は、それゆえに相互の関連を問いつけたのであろう。彼にとって家族(論)こそ、我が国におけ

る古い道德と新しい道德とが交叉する場であり、自らの文明論の証左とすべき実験の場でもあったのである。

Ⅱ.福澤の家族論とそのアジア的地平

本考察では、これまで西洋文明の影響という視点から主として論じられてきた福澤論吉の家族論の中に、儒教的陰影をたずねることによってその「アジア的性格」を検討したい。これにより近代日本における福澤の家族論が果たした役割のより精緻な評価が可能となろう。

福澤の家族論は、キリスト教を土台とする西洋文明の受容の面でも反儒教主義の面からも、確かに宗教が重要な触媒となって成立したといえる。だが、「覚書」(明治8~11年)、『福翁百話』やその他の著作にみられるように、福澤は既成宗教を同列に置き、特定の宗教に偏らない相対的な視点から論じている。その代わりに彼は、習慣的に形成される「モラルスタンダード」を重視し、家族論においても、長い期間人々の間で培われてきた精神的土壌をすべて排除するものではなかった。

例えば『皇室論』では、皇室と国民の関係が父母と孝子の関係に擬制され、皇室が一視同仁の大徳をもって国民を感化し、全国の徳風を篤くことが是とされている。福澤の家族論の縦軸には、孝を重んじる親子関係の存在が確かに認められ、この限りでそのアジア的性格を議論する余地が生まれる。

しかしながら福澤に見られるこうした家族の儒教的把握は、朝鮮北学派の開国論者であり金玉均や朴泳孝らの師であった朴珪壽に比べれば、やはり大きな差異を有していた。なによりも福澤が考える家族は、理屈や損得ではなく、情愛によって結ばれる「親友の集合」体としての「楽しき我家」であったはずである。そうした福澤の人間関係のあり方への感性や理解が、その家族論を、朝鮮開化派と家族関係の「縦軸」の把握では大枠で一致させながらも、彼らの「国家的家族観」からは遠く隔たるものとしたのであった。

プロジェクト③

劉 培峰(北京師範大学法学院)
「中国非政府组织立法法的评论与思考」

中国非政府组织立法法的主要内容和特点可以概括

为以下几个方面。第一，管理体制上的“归口登记，双重负责、分级管理”。“归口登记”是指社会团体统一由民政部门和地方县级以上各级民政部门登记，颁发《社会团体法人登记证书》。经合法登记的社会团体，拥有法人地位，依法享有民事权利，承担民事义务。“双重负责”是指每一个社会团体都要接受登记管理机关和业务主管机关的双重管理。第二，管理过程上许可主义和放任主义。中国在非政府组织资格的准入方面事实上采取的是严格的许可主义制度，没有经过许可而成立的非政府组织是非法组织，其活动不受法律保护，而且应当被取缔。与严格的许可主义相对应的是，政府对民间的一些兴趣组织如民间的花会、庙会、读书会、沙龙、论坛，家庭教会等则采取放任的态度。第三，管理导向上限制竞争、抑制发展。非政府组织的管理从总体上呈现限制竞争、抑制发展的基本导向。条例的第13条规定，在同一区域内已有业务范围相同或相似的民间组织，没有必要成立的，对于民间组织的成立申请不予批准。条例的19条对非政府组织分支机构、代表机构的设立也做了规定，社会团体的分支机构不具备法人资格，而且非政府组织不得设立地域性的分支机构。

总体来看，现有非政府组织立法存在核心问题是立法缺位和观念滞后。其一，在政府对多元社会缺乏充分体认，对社会团体的存在缺乏足够的理解和宽容，民间社会的表达和实践没有实现一定程度的理性化、程序化的社会氛围之下，一部保障公民结社权和结社自由的《结社法》应当是一定时期内非政府组织立法的首要目标。其二，非政府组织管理条例对非政府组织的内部治理的规定过于原则，缺乏可操作性。其三，非政府组织是国家与社会的中介环节，其他配套法规的建设也非常重要。

(日本語訳)

「中国非政府組織立法への評論及び思考」

中国非政府組織立法の主要な内容及びその特徴は、以下3点にまとめられる。

第一に、管理体制における「帰口登記、二重責任負担、等級管理」である。「帰口登記」とは、社会团体は全て民政部門と県以上の地方各級民政部門により一元的に登記され、『社会团体法人登記証書』が賦与されることを指す。合法的登記を経た社会团体は法人の地位を有し、法律に基づいた民事的権利が与えられ、また民事的義務を請け負う。「二重責任負担」とは、全ての社会团体は登記管理

機関及び主管する機関による二重管理体制を受け入れることを意味する。

第二に、管理の過程における認可主義と放任主義である。非政府組織資格の賦与に関し、中国は事実上厳格な認可制度を採用し、認可されることなく成立した非政府組織は非合法的なものとされ、その活動は法の保護を受けることが出来ないのみならず、取締りの対象となる。このように厳格な認可制度を敷く一方で、政府は民間の物資交流会や縁日、学習会、社交会、論壇、家庭教会等民間組織に対しては放任する態度を採っている。

第三に、管理指導上の競争への制限と発展への抑制である。非政府組織管理は総体的に、競争を制限し、発展を抑制している。たとえば、条例第13条は、同一地域内において既に存在している部門の業務と同様か、或いは似通った内容を行おうとする民間組織は設立する必要がなく、このような民間組織の設立申請は承認できないものと規定している。また、条例19条は非政府組織の支部や代表機関の設立に対しても、社会团体の支部組織は法人資格を備えず、また非政府組織は地域的支部機関を設立できないと規定している。

総体的に見て、現在の非政府組織立法が有する核心的な問題は、立法の空席、そして観念的停滞にあると言える。具体的には、以下のことが指摘できる。第一に、多元的社会に対する政府の認識は十分なものではなく、社会团体の存在に対しても十分な理解と寛容の態度を持ち合わせていない。民間社会の表現と実践が一定程度の理性化、手順化が成されていない状況にあつて、公民の結社の権利と結社の自由を部分的に保障する『結社法』は、一定の期間における非政府組織立法の第一の目標である。第二に、非政府組織管理条例における組織内部の管理に関する規定は、原則を重視するあまり運用処理能力に欠ける。第三に、非政府組織は国家と社会を仲介する組織であるため、その他の関連する法律を制定する作業も非常に重要である。

プロジェクト④

野村 伸一(慶應義塾大学文学部)

「祭祀儀礼の現場からみた東アジア

—中国、韓国、台湾を中心に—

0. はじめに

今日、東アジアでは近代的な生活様式の進展が

あまりにも早く、それに適応できない人びとが数多くいる。都市、農村、漁村を問わず、多くの人びとが確実な倫理、生きる指針を持つことができずにいる。そこで一般的には宗教が求められているといわれる。

北京に出入りする活仏 北京では活仏といわれる僧侶が招かれて法話を語り、また都市民の相談に応じているという(2007年6月10日『朝日新聞』)。チベット仏教が競争社会北京のまっただ中で求められていることを報じたものである。

その記事ではまた当局の公認しないキリスト教が家庭教会のの名のもとでかなり頻繁に展開されていることも報じている。

希求される宗教 この種の報道は1990年代からよく知られている。なかでも1999年に中国当局が気功集団「法輪功」を違法組織として苛酷に取り締まったことは世界中に知れ渡った。そして、それ以後も中国ではチベット仏教をはじめとした諸種の宗教への国家統制がつづいている。しかし、それは裏返すと、今、宗教がいかに希求されているかを物語っている。

韓国、台湾でも膨張した宗教組織 ところで、生きる指針を求めて宗教的なものへ傾斜していくことは中国だけのことではない。韓国は朴正熙軍事政権のもとで社会の新生、開発が強力に推進された。以来、キリスト教や新宗教が爆発的に膨張した。台湾社会も、この20年ほどのあいだに、各地の寺廟は人、物、カネの面で大きく伸展した。韓国や台湾のばあい、一部の宗教団体は規模があまりにも肥大化し、その世俗化が案じられるほどである。

1. 不安な時代の宗教

1.1. 問題意識—「信巫鬼、尚淫祀」の地へ

今回の報告は、こうした宗教への傾斜という状況のなかで、比較的、報じられることの少ない農村や島嶼部の現況に焦点を当てた。ただし、チベットを含む東アジアの内陸部はまだ自分の目で確認できていない。それで、今回は東シナ海周辺の地域を主たる対象とした。

越人の文化の地とその祭祀 この地域は歴史的には越人の文化を濃厚に保持していた。

それは基層文化の至るところに痕跡を残している。越人は江蘇省から広東省に至る広い地域に分布した。そして、この地域は古来「信巫鬼、尚淫

祀」の地とされてきた*1。この多少見下したことは、合理性を重んじる人びとにはわかりやすい。つまり、それは、彼らにとって、中国だけでなく、東シナ海周辺地域の宗教文化あるいは思想にかかわることばとして今なお、有効なのである。

問題は、このことばは儒教の士大夫が外から眺めていったものだということである。とくに「尚淫祀」には、元来、守るべき道理や礼儀にそぐわないことという価値観、蔑視が込められている。けれども東アジアの現実の暮らしは千年以上もの長いあいだ、このようによばれる文化状況のなかで営まれてきたのである。そうして、上から強いられた秩序が緩んだり、それ自体が歪曲すると、押さえつけられていた情が「淫祀」のかたちで噴出する。

「信巫鬼、尚淫祀」の内側へ この循環は望ましいことではない。それは人びとの生活実感に沿った文化認識が歴史的になされてこなかったことを示している。この循環を断ち切るためには、「信巫鬼、尚淫祀」の内側にはいりこんで、そこに形成されてきた無形の文化史を再構成しなければならない。それに無頓着である限り、東アジアはいつまでも同じことをくり返すだろう。つまり、かつての白蓮教や弥勒信仰、19世紀朝鮮の東学、そして今日では「法輪功」であり、明日はまた何か新たな宗教かもしれない。問題の所在はここにある。

1.2. 欧米のみた中国の宗教状況と根柢の問題

2007年4月28日、「欧米がみた中国—自由と民主主義」という番組が放送された(NHK衛星第一放送)。このなかで現代中国の宗教状況が報じられていた(後掲、映像参照)。

一層、必要な信教の自由 ここには欧米の批判的な視点がよく反映されている。現代日本の都市民、少なくとも知識人の多くはこうした欧米の見方に賛同するだろう。一言でいうと、いかなる体制であれ、信教の自由はより幅広く認められるべきだという視点にいきつく。それはそのとおりである。ただし、問題はその先にある。仮に、信教の自由が進むとして、その先にはどういった信教がありうるのだろうか。

キリスト教は東アジアの人びとのあいだでは家庭教会というかたちで浸透している。信者はすでに四千万人にのぼるとのことである。とはいっても

の、これがそのまま人びとのこころの拠り所として機能していくことになるのだろうか。また、こうしたドキュメンタリーに現れない宗教行為は、はたしてどのようなものとしてあるのだろうか。その点は不明である。

各地の祭祀現場へ こうした問題への取組は各地の祭祀現場をみて歩かなければ知りようがない。そして、それは祭儀や習俗のかたちでなされている。その多くは、百年、二百年といったくり返しのなかにある。それは必ずしも、都市民のように切迫した不安からの癒しを求めておこなわれるものではない。それらは、当然のことながら現代的な話題を追究するマスメディアの関心を持つところではない。

1. 3. 祭祀儀礼とは

ところで祭祀儀礼ということばは何を意味するのか、あまりよく実感できないかもしれない。少し捕捉しておきたい。

宗教にはさまざまな要素がある。教義、組織、儀礼、司祭と信徒など。

祭祀儀礼は民俗宗教の核心 これらのうち祭祀儀礼は宗教の核心的な部分をよく表現している。とくに教主、教義、教団組織などのない民俗宗教では祭祀儀礼がすべてといえるかもしれない。なぜなら、キリスト教や仏教、道教、儒教のように経典を持つ宗教とは違い、民俗宗教は人びとのあいだで長い時間にわたっておのずと形成されてきたものだからである。

民俗宗教の祭祀儀礼には参加者の死生観、価値観、喜怒哀楽の形が不定形に込められている。

民俗宗教では、また、歌や舞、神話が伴い、それらのなかには高度に洗練されたものもある。

いずれにしても、それら、いわば生活のなかの実践宗教をみることなくして、東アジアの宗教を語ることはできない。いわんや偶発的な事件や極端な現象だけに目を奪われていたのでは、さしあたりの解説はできても、その根柢に何があったのかわからないであろう。

2. 祭祀儀礼の現場から

2. 1. 各地の祭祀儀礼のなかからの選択

東アジアの各地域においては、かつての時代ほどではないとしても、今なお、さまざまな祭祀儀礼がおこなわれている。

参与する人びとの動態を中心として ここでは、時間の制約もあるので、儀礼の内容そのものではなく、そこに参与する人びとの動態を中心として広くみわたしてみる。そのことで、少なくとも中国南部や台湾、韓国南部などの宗教文化の一端は知ることができるだろう。

選択の基準 多種多様な祭祀儀礼のうち、ここでは、「各地域のうちとくに印象に残った祭祀儀礼」という基準でいくつかの事例を取りあげる。もちろんこれは学問的な基準ではない。地域間の祭祀儀礼の比較をするときは、元来は、たとえば、憑依の儀礼、死者霊儀礼、また、村落単位の祭祀儀礼などといった枠を設定し、その枠のなかで比較すべきであろう。

しかし、東アジア各地域の祭祀儀礼をより大きく俯瞰するときには、枠を限定してみていくのはあまり得策ではない。

2. 2. 映像による概観

2. 2. 1 欧米がみた中国の宗教—チベット仏教とキリスト教

先に述べた2007年4月28日の衛星放送の番組の一部である。この番組では宗教問題に関して、仏教とキリスト教、法輪功を取りあげ、信教の自由が不足していると訴えている。

なお家庭教会の四千万人という数のほかに、参考までに宗教人口の概数をあげると、チベット仏教900万人、カトリック350万人、プロテスタント700万人、イスラム教1800万人とされる（自治体国際化協会のウェブサイト「中国宗教事情」）。

2. 2. 2 中国福建省南安の観音信仰

観音成道の日の盛儀 2002年10月22日（旧9月19日）から28日まで一週間、南安市四黄村の草亭寺で観音菩薩のための祭儀がおこなわれた。草亭寺では年に三回、観音の誕生、出家、得道（涅槃）の日に祭儀を催す。2001年の得道の日には増改築記念として盛大におこなった。

泉州の傀儡戯の劇団を招いて4日間、目連戯を演じた。これは人びとの自発的な寄付でまかなわれた。こうした大規模な行事のばあいは管理委員会が運営を取り仕切るが、実際に寺にきて熱心に慶祝行事をおこなうのは女性たちである。

観音信仰の復活 草亭寺は今日、少なくとも文革以前にあった観音信仰を取り戻している。こうしたことは四黄村だけでなくおそらく、他の地方

においてもいえるであろう*2。観音菩薩の信仰は中国においては古代の女媧をはじめとする女神たちの信仰と結びついた。

それは密教の變化観音の思想とともに民間に広く流布し、中世以降は新たな女神たちの創造とも結びついた。それは東アジア宗教文化史の核心のひとつである*3。

2.2.3 福建省古田臨水廟

陳靖姑の祖廟の祭儀 2002年2月5日(旧1月13日)、福建省古田の臨水夫人廟で主神陳靖姑(臨水夫人)の聖誕の儀礼がおこなわれた。各地の村落から法師や童乱などとともに入村者が進香にくる。入村者を率いるのは近世以降は男の宗教者であるが、元来は巫女だったのである。

陳靖姑は福建省の中部から東北部にかけて広く信仰される。陳靖姑はもとは巫女であったとおもわれる。子どもの生育に関する神として知られるが、明清以降は地域の強力な守護神として伝承される。

観音菩薩の化身 陳靖姑は福建の民間伝承では観音菩薩の化身といわれている。一方、清代の『閩都別記』によると、観音が指の血を弾いて、それから化生したのが陳靖姑なのだという。もっとも、泉州の民間では、この観音の指からの化生の話は媽祖の話とされている*4。これらは観音と民間の女神たちが同じ心象で観じられていたことを物語る。

2.2.4 寿寧県下房村の正月祭礼

陳靖姑を中心とした祭儀 2002年1月30日(旧1月7日)から2月3日まで、5日間、福建省寿寧県下房村で正月祭礼がおこなわれた。下房村は陳氏の同姓村落ともいえる村である。この衆聖宮という廟では、陳靖姑と華光大帝を一年おきに主神として迎え、祭儀をおこなう。2002年は陳靖姑が中心となった。

現実の陳氏一族は過去に科挙及第者を出したこともあり、この地では儒教による礼儀作法*5がよく守られている。にもかかわらず、陳靖姑を陳氏の祖婆と称し、一族あげてこれをまつているところは興味深い。祖先は必ずしも男系の血族に限らなかったことを示唆している。

過関 また、祭儀末尾の過関という儀礼は入村との関心の在処をよく示している。過関は子の生

育を祈る祭儀で、他の地方でも今日、なおよくおこなわれる。一般的にいて、急速な近代化のなかでも、病気と死、そして子の生育に関する祭祀儀礼は残る傾向がある。

2.2.5 莆田市小厝村の奉納芸能

莆田でさかんな奉納芸 2000年9月9日、福建省莆田市城廂区小厝村で、ある一家が5歳の息子の健康祈願のため、村の神に傀儡戯を奉納した。莆田地方ではこの種の奉納芸能がさかんである。この日の費用は2、300元ほどのことであった。これは、ある自営業一家の私的な願掛けの行事であるが、近隣の人びとも芝居を見物し、ともに食事をする。これは昼過ぎから夜ふけまでつづく。そこには、村共同体における人びとのつながりがよくみられる。

祭儀の部分は元来は、道士か法師がやるべきものだが、近年は傀儡師が兼ねてやることも多いという。今回もそうであった。依頼者にとって、祭儀次第そのものは二次的なだろう。

2.2.6 北斗戯—莆田地方の生育と関連した傀儡戯

2000年9月12日、福建省莆田市北岸区の五帝祖廟で、ある一家の奉納した北斗戯がおこなわれた。北斗戯は折子、子育てに関連する独特な祭祀芸能である*6。

女神たちの先導する生育儀礼 北斗戯では陳靖姑臨水夫人と北斗七星の化身高夫人への信仰が重層している。中国では北斗星は擬人化され、人間の生命の生殺与奪の力を持つと信じられている。いづれも女神のかたちをとるのは注目される。そして、ここでも末尾に過関がおこなわれた。

今回の主人公は生後7ヶ月の男の子である。この子は生後間もなく病んだ。しかし、さいわい病気は快癒した。そこで、その父母は生活は楽ではないが、願ほどきの北斗戯を催した。

2.2.7 濟州島の生育儀礼—仏道婆さんの来臨

基盤にある「生命の花」 1986年10月16日、濟州島の新村里で仏道迎えという生育儀礼がおこなわれた。このときは前後2週間にわたる大規模な祭祀儀礼のなかの一環としておこなわれたが、単独で催すこともある。この祭儀には濟州島民の考える生命の源がよく窺われる。すなわち仏道婆さんが西天花畑の生命の花をもたらすことによって、

人は生命を授かると考えられている。その神話（ポンプリ）には生命を枯らす滅亡悪心花^{メヨルマンアクシムコツ}というものもある。濟州島は国際リゾート地として、今日、大規模開発がとめどなく進んでいる。ただ、その一方で、元来の島民、とくに海女たちの健在するところでは、この祭儀は維持されている。今日、濟州島出身の在日（韓国・朝鮮人）のあいだでも、時どき、仏道迎えと祖先供養^{シワンマジ}のおこなわれている。一世たちの希望によるものであることはいうまでもない。

その基盤にある「生命の花」の観念は東アジアの基層文化を形成するものである。

2.2.8 台湾南部の祈子儀礼

花を媒介にした祭儀 1998年3月7日から9日にかけて、台湾台南市建業街の臨水夫人廟で生育儀礼をくり返し、みた。ここは若い女性や小さな子どもを連れた母親が頻りに訪れる。平日でも小さな法事がよくおこなわれている。なかでも梗花穢とよばれる法事は花を媒介にした祭儀で興味深い。

花をかざす この祭儀の背景にあるのは生命の花の観念である。すなわち、女性は誰でも陰間に花園を持っている。その花が弱ったり、萎れていると、この世の生に異常が生じ、子が授からないという。そこで、法師や童乩^{ツンギ}が陰間に下りていく。彼らは花園の様子を窺い、花の根が弱っていれば、これを強化する。そして、この世の白い花は男の子、赤い花は女の子と考える。子どもを望む女性にはこの花が側頭部にかざされる。

伝承によると、臨水夫人は百花橋を治めている。そして、そこから花を送ることで、この世に新たな生命をもたらすという*6。これは濟州島の生育儀礼と同じ考え方に立っている。

2.2.9 韓国南部のシッキムクツ―死者霊への洗い儀礼

シナウイ調に合わせて霊を洗い浄め、送る 1996年3月2日、韓国全羅南道求禮郡求禮邑^{クレグ}で若い女性の霊魂済度儀礼シッキムクツがおこなわれた。担い手は珍島^{ジンド}シッキムクツで名高い金大禮巫女^{キムデレタンゴツレ}ほか、珍島から招かれた楽士たちであった。この日の供養対象者は、全南大学の国楽科の学生であった。彼女は卒業を間近にした1月のある日、交通事故のため急逝した。

車を運転していた婚約者は頭部を負傷したものの生き残った。その痛ましい事故のあと、まだい

くも経たなかったため、祭場には悲痛な雰囲気^{ムネ}が漂っていた。

地域の情調にかなった祭儀 シッキムクツではシナウイという独特の巫俗音楽に合わせて故人の霊をよぶ。そして、故人の生前の蟻^{むだかま}りを解き放ち、浄水で洗い浄めて、送り出す。ここでは、口寄せや巫女の激しい跳舞はみられない。シッキムクツは巫俗と仏教の死者供養の儀礼、そして全羅南道の豊かな音楽環境が組み合わされた死者霊儀礼である。それは民間の祭儀であるだけに、地域の人びとの情緒に深く根付いている。そのため、今日もなお、非業の死を遂げればあいにはしばしばおこなわれる。

2.2.10 冥婚―死者たちの結婚

靈魂の結婚式 1997年3月1日から翌朝にかけて、韓国慶尚北道盈徳郡柄谷面のある家で靈魂の結婚式がおこなわれた。この家の長男は仕事先の釜山で交通事故により急死した。独身であったため、巫女^{ムンジン}に頼んで、これより以前に未婚のまま死んだ女性のうちから、一人を選んで縁組みをした。二人の結婚式はオギクツという長い時間にとたる死者霊済度のなかの一部分としておこなわれる。男女の人形を用いて実際の結婚式さながらに盃を交わす。そのあと二人は共寝をする。これにより、死者霊済度はより確かなものとなる。これは一般に冥婚とよぶ。朝鮮半島のみならず、東アジアでは古くからおこなわれている祭祀儀礼である。日本でもかつては広くみられた。今日では、台湾で、なお、時どきおこなわれている。

これらの背景には、この世と同じかたちの他界が存在するという観念がある。そして、そこでは何よりも配偶者を得て家庭を築くことが望まれる。そうしてこそ靈魂は安定するということが信じられているのである。

2.2.11 少年少女らの神送りの祭儀―東アジアの祭祀伝統の基盤

昨年、2006年8月19日の夜、福建省政和県禾洋村ではきわめておもしろい神送りがおこなわれた。禾洋村では毎年旧暦7月17日から3日間、村の主神である東平尊王とその夫人を村内に迎える。そして、四平戯という古色豊かな芸能を奉納し、最後にまたもとの神の座に送り返す。四平戯は明代末期にさかのぼるだろうといわれていて、

それ自体の古さも注目されるが、ここでは、その神送りも注目される。すなわち、この祭儀を終えるにあたって、主として少年少女が一心に東平尊王ほかの神がみを送るのである。そのとき唱える文句は里蔭（李英⁷⁾陳李／通報天旨／東平尊王／有靈感応／禾苗大熟／五穀豊登／風朝雨順／国泰民安／咒塔過案／郷村明静／家家清吉／戸戸平安⁸⁾。こうした神送りのことばの意味は子供たちにはよくわからないとおもわれる。しかし、その祭祀行為の記憶は音と手拍子、敬虔な思いとともに鮮明に残るだろう。それは二百年、三百年の共同体の記憶として生きつづけてきたものであり、今、ここで確実に引き継がれていく。

3. まとめ

中国ほか一村落共同体の記憶 東アジアの祭祀儀礼の現場は、多くのところで危殆に瀕している。そして、都市では、やり場のない共同体の記憶を胸に持った者たちが各種の新宗教に流れ込んでいく。法輪功に象徴されるものは単なる気功の御利益信仰ではないだろう。その根柢には村落共同体の祭祀の場で蓄積された記憶があるとおもわれる。中国の現実の村は今日、出稼ぎで引き裂かれている。祭祀儀礼の多くは担い手そのものがいなくなり、維持がむずかしい。けれども、かなり山深い村落においても、村人がいるところではなお寺廟の再建が進んでいる。それは驚くばかりである(写真1、2)。



▲写真1 福建省政和県楊源村の寺院



▲写真2 楊源村付近のある廟での祭祀

台湾—過去の記憶の甦りと拡大 台湾では、かつては畏怖すべき疫神の代表であった王爺が地域の守護神として多くの機能をはたしている。そして、それ以上に注目されるのは媽祖である。媽祖はもともと漢族が移民するときに捧持された。それは航海守護神的な機能を持っていた。それが移民先に定着してからは偉大なる母親としての信仰を受け、今や全島的に篤く崇敬されている(写真3)。



▲写真3 台湾鹿港の媽祖

これらは過去の記憶が完全に甦り、さらに拡大していることを物語る。

韓国の村落における教会の定着と役割 また韓国では、若者が都市に去ったあとで、地方のすみずみにまでキリスト教が進出して定着している(写真4)。



▲写真4 韓国全羅南道新安郡テン島の漁村に建てられた教会

全羅南道の一部の村落では、教会のミサはかつて村の巫女が担っていた機能を十分にはたしている。しかし、このばあい、根本的に生じるのは死者の弔いに関する葛藤である。何しろプロテスタントは伝来の祖先祭祀の祭儀を認めないのである。

不十分な東アジアの宗教文化史 こうしたことをみると、東アジアでは祭祀儀礼の記憶そのものが不安定な状態に置かれていることがわかる。その帰趨はおそらくこの地域の未来像とかかわりがあるだろう。ただし、今後の不安をあれこれ論じる以前に、わたしたちはまずは東アジアの祭祀儀礼の実相とその根柢の思想が実は広範に繋がりを持つということを認識しなければならない。

共同体の記憶にことばを与えること 何はともあれ、少なくとも、次のようにはいえるだろう。すなわち、東アジアには、一方ですでに都市の生活に十分に適応し、日々さほど思い患うことのない人がいる。そして、キリスト教や欧米の近代思想に代表される現代生活に死後を託せる人も少なくはない。しかし、そうした人びとの数よりは、それに馴染まない人、あるいは馴染めない人の数の方が圧倒的に多い。

こうしたなかで、彼らの記憶に誰がことばを与えてくれるのだろうか。それは一義的には教育の仕事であるが、それだけでは足りないような気がする。

- *1 徐曉望「福建省における女性の生活と女神信仰の歴史」野村伸一編著『東アジアの女神信仰と女性生活』、慶應義塾大学出版会、2004年、110頁。
- *2 四川省の観音会の賑わいについては、謝荔

「現代中国内陸部の宗教事情—四川地域の民間信仰におけるヒト・カネ・モノ」『アジア遊学』No. 24、勉誠出版、2001年、93頁参照。

- *3 野村伸一編著『東アジアの祭祀伝承と女性救済—目連救母と芸能の諸相』、風響社、2007年7月の概説編参照。
- *4 徐曉望『福建民間信仰源流』、福建教育出版社、1993年、335頁。
- *5 葉明生「莆仙傀儡北斗戲と民俗、宗教の研究」『日吉紀要言語・文化・コミュニケーション』No. 30、2003年参照。
- *6 野村伸一「台湾人の儀礼と「物語」(二)」『日吉紀要言語・文化・コミュニケーション』No. 25、2000年、慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会参照。
- *7 村民の教示では李英だが、意味不明のため改める。ここの陳李とは陳靖姑、李三娘すなわち女神「臨水夫人」のことである(葉明生・黃建興「政和県禾洋村的四平戲調査報告」『中国四平腔學術研討會論文匯編』、福建省芸術研究所、2006年、372頁参照)。
- *8 野村伸一「四平戲(2)—福建省政和県禾洋村の祭祀芸能」『日吉紀要言語・文化・コミュニケーション』No. 38、慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会、2007年、85頁。

シンポジウム

日時 2007年4月19日(木) 15:00～18:00
 場所 慶應義塾大学三田キャンパス 北館ホール
 演題 日韓共同シンポジウム
 「東アジアの平和構築は可能か」
 共催 韓国国政弘報処、駐日韓国大使館
 東アジア研究所は韓国国政弘報処(韓国政府広報部)、駐日韓国大使館との間で、将来的に交流と協力の関係を深めていくことを約束している。今後とも共催の形でシンポジウム、講演会、研究会などを開催していく予定であるが、その第1弾として今回、このような日韓シンポジウムを企画し、共同開催した。プログラムは以下の通りであるが、これはすべて同時通訳で行われた。
 15:00 開会挨拶 国分良成 慶應義塾大学東アジア研究所長
 柳 明桓 駐日韓国大使

15:20 祝 辞 金 蒼浩 韓国国政弘報処長
(政府スポークスマン)
15:30 基調講演 朴 在圭 韓国・元統一部長官
16:00 休 憩
16:20 パネリスト報告・討論
小此木政夫 慶應義塾大学法学
部長、教授
李 鍾元 立教大学法学部教授
添谷芳秀 慶應義塾大学東アジ
ア研究所副所長
朴 明林 延世大学校教授
司会 国分良成

18:00 閉会の辞

報告と討論の中心は、行き詰まりを見せる北朝鮮と六者協議の問題であり、イラク問題に忙殺されるアメリカの対北朝鮮外交の限界、北朝鮮の核保有の既成事実化への動きとそれへの対応、日韓安保協力の障害と可能性、日韓戦略対話の可能性などについて、率直な意見交換が行われた。また、日本の外交的手詰まりについても議論がなされ、北朝鮮問題に対する日本の発想の転換の必要を指摘する論者もいた。

プログラムにもあるように、韓国からは現職閣僚、現大使、元閣僚の方々が参加され、熱心に討論に加わられた。日本からも北東アジアに関するオピニオンリーダーにパネリストとして参加していただいた。こうした結果としてこのシンポジウムは内外から注目され、専門家、ジャーナリスト、教員、学生・院生が多数集まり、きわめて豊かな内容のシンポジウムとなった。(文責 国分良成)

日 時 2007年6月13日(水) 14:00～17:30
場 所 慶應義塾大学三田キャンパス
東館6階G-SEC Lab、旧図書館記念室
演 題 日中共同シンポジウム
「日中関係への提言」
共 催 新日中友好21世紀委員会、
東アジア研究所

新日中友好21世紀委員会は、2003年に小泉元首相と胡錦濤国家主席により日中関係に対する提言機関として設置された民間の諮問機関である(日本側座長:小林陽太郎、中国側座長:鄭必堅)。今年6月に日本で開催された同委員会第6回会合に際して、日中関係の悪化傾向をいかにくい止めるかについて、学生たちからの意見や提言に耳を

傾ける機会をもつこととなった。そこで、同委員会の日本側秘書長を務める国分が東アジア研究所との共催によりシンポジウムを企画した。なお、シンポジウムは日・中の同時通訳で行われた。

学生からの提言としては、慶應義塾大学法学部の国分良成ゼミ、添谷芳秀ゼミと、東京大学法学部の高原明生ゼミの学生代表チームによるプレゼンテーション大会の形式をとった。これらの発表を受けて日中両国の委員がコメントを行うことで全体議論がスタートした。中国側委員からは、張蘊嶺・中国社会科学院アジア太平洋研究所長、白岩松・中央電視台キャスター、日本側委員からは五百旗頭真・防衛大学校長、向井千秋・宇宙飛行士らがパネリストとして参加した。

各学生代表チームの報告は短期間のうちに集中的にまとめたものではあったが、率直なしかもそれぞれに具体的で個性的な内容であり、参加した委員や関係者から賛辞が多く寄せられた。終了後、安西塾長を交えて茶話会が旧図書館記念室で行われた。当日のプログラムは以下の通りである。

14:00 開会 国分良成 東アジア研究所長
(2007.6当時)
挨拶 坂本達哉 慶應義塾常任理事
15:05 座長挨拶 鄭 必堅 新日中友好21世紀
委員会中国側座長
15:15 学生代表チームの提言
慶應義塾大学 国分良成ゼミ
「CHI-JA JIRA: Broadcasting Service」
東京大学 高原明生ゼミ
「緊張と融和から生まれる新たな関係への
模索」
慶應義塾大学 添谷芳秀ゼミ
「日本の『価値外交』と東アジア共同体」
15:00 21世紀委員会委員からの発言
張 蘊嶺 中国社会科学院アジア太平洋
研究所長
白 岩松 中央電視台キャスター
五百旗頭真 防衛大学校長
向井千秋 宇宙飛行士
15:30 全体討論
16:45 閉会挨拶 小林陽太郎
新日中友好21世紀委員会
日本側座長
17:00 茶話会(旧図書館記念室)
挨拶 安西祐一郎塾長

17:30 終了
(文責 国分良成)

研究会 ●

日時 2007年5月28日(月) 16:00～18:00
場所 東アジア研究所・第一共同研究室
講師 顧 林生氏(中国・清華大学都市計画設計研究員公共安全研究所所長)
演題 「中国の危機管理と社会の変容」

顧林生所長は、名古屋大学で国際開発学の博士学位を取得後、中国に戻り、現在は清華大学において危機管理と地域開発を専門に研究し、また積極的に政策提言を行うなどこの分野において頭角を現しつつある若手研究者である。

顧所長の話は多岐におよび、中国における公共安全と危機管理の全般的状況、これらに対する理念、政治意識、法制度の変化、また国家や政府のこの面での制度づくり等に関して報告した。中国でも自然災害や疫病などの伝統的な災害と同時に、近年では科学・技術上、経済上、テロなどの非伝統的な災害への関心が高まっているが、公共安全・危機管理の問題が国家の緊急課題として認識されるようになったのは、2003年のSARS以来だという。

顧所長によれば、中国では災害や事故の件数が極端に多く、これらを削減するための制度的・意識的改革を急がねばならず、特に来年は北京オリンピックが予定されていることもあり、緊急に対策を講じなければならないという。2003年の1年だけでも、こうした災害や事故でGDPの6%が失われたという報告があるとのことである。

しかし現実の体制と意識はなかなか改善されず、特に問題なのはセクショナリズムと責任回避の体質だという。多くの事故も事前の対策で防げるケースも多く、現在、自身も関わっているという「突発事件応対法」の制定を急ぐ必要があることを顧所長は強調した。

今回の研究会は、全国的な麻疹の流行により大学が一斉休校となり、学生・院生が参加できない状況での異例の形となったが、外部から数多くの専門家が集まり、顧林生所長の流暢な日本語と報告内容の面白さもあって、活発な意見交換を行うことができた。(文責 国分良成)

日時 2007年6月1日(木) 18:00～20:00
場所 東アジア研究所・第一共同研究室
講師 王 甫昌氏(台湾・中央研究院社会学研究所副研究員)

演題 「台湾の族群(エスニック)政治」

台湾では、エスニシティ(台湾で「族群」という)が政治問題化しているとされている。よく言われる「本省人」と「外省人」の対立とは、エスニック紛争なのだろうか。ところが、一般にエスニシティとは何であるかが正確に理解されているとは言えないため、概念上の混乱が起きている。

そこで、類似した用語である「種族」や「民族」との比較を通じて、概念整理をしたい。種族とは変更不能な身体的特徴から分類され、種族主義(racism)は往々に「優秀種族」からの「劣等種族」へ差別を正当化するために用いられた。次に民族であるが、これは人間の集団を政治的に分類し、民族主義(nationalism)は、言語・文化・歴史などを共有する抑圧された人々を解放し、主権を持つ政治共同体の構築を正当化するために用いられた。ところが、ナチズムのように、民族主義は事実上種族主義と同じように用いられることがあった。すなわち抑圧者を解放するための論理が弱者を抹殺する論理にすり替わったのである。

エスニシティ(ethnicity)は、社会の中で異なる起源や文化的差異を元に分類されるグループである。エスニシティは、弱者のグループが国家に平等を求める運動を正当化するために用いられた。この点でエスニシティはジェンダーの概念に似ている。異なるエスニシティは、差異があっても平等であると主張される。ところが、エスニシティもまた、他のエスニック・グループを抑圧するために用いられること、すなわち種族主義と同じように用いられることがある。台湾においても、エスニシティが本来の定義通りに使われないことがあり、「同化主義」的言辞がまかり通ることが多い。エスニシティにまつわる誤解を正し、エスニック・ブルーリズムを強調して行きたいと考えている。(文責 松田康博)

日時 2008年1月18日(金) 18:00～20:00
場所 東館6階G-SEC Lab
演題 「李明博政権と日韓関係—ヴィジョングループからの提言」

報告者 陳 昌洙氏(世宗研究所副所長・同日本研究センター長)

朴 喆熙氏(ソウル大学国際大学院教授)

ヴィジョンの提言は、日韓関係に現実に存在するインフラ(潜在力)を顕在化させることによって、両国に逆算型で進路を提示しようとするものであるとの趣旨の報告が行われた。その上で、李明博政権はブレーンに未来志向の日韓関係構築に積極的な人材を擁しており、日本は今後そうした人材と協力し、日韓両国は共通のヴィジョンを作成すべきであることが強調された。

質疑応答では、ヴィジョン参画における日本側のデメリットを指摘する意見や、歴史問題を中心に各論から総論(ヴィジョンの提言)に懐疑的な意見が上がる一方、共に地域(東アジア)における中間領域に位置し、高い同質性を有する日韓が持つ共通のヴィジョン形成の潜在力に寄せられる期待も少なくなかった。また日本の戦略的政策形成の面から参画を支持する見解もあった。歴史問題は「解決」から「管理」へ、朝鮮半島の枠を越え地域的な協力へと、両国関係の転換が提起された。一方実際の協力は感染症対策・環境対策などから段階的に行われるべきであるという意見が支持された。

また、ヴィジョン実現のためのアクションプラン、そこで提示された認識共同体、日韓未来財団の具体的内容に関心が集まった。歴史問題不問、経済重視とする李政権の成立に現在の相互不信感払拭の期待が集まる一方、期待は一時的なものとする抑制的意見も出された。歴史問題の日本の国内問題としての解決や、従来なされてこなかった両国間の戦略的対話が韓国側から積極的に提案されることは、日韓関係におけるパラダイム・シフトでもあり、日韓協力を地域共同体形成の原動力としての潜在力が指摘された。李政権成立を好機と捉え、2010年(日韓併合100年)を一つの指標としたヴィジョン提言が期待された。

(文責 植田麻記子)

東アジア研究フェローシップ ●

当東アジア研究所では、昨年度より添谷芳秀新所長(2007.10就任、前副所長)の下、当大学グローバルセキュリティー研究所の協力も得て、

韓国の高麗大学、中国の北京大学および復旦大学、台湾の台湾大学と共同で「東アジア研究フェローシップ」(英語名:Fellows Program on Peace, Governance and Development in East Asia)の運営に参加している。以下(4月24日、5月22日、6月19日開催)は、2007年度前半に来塾したフェローによる研究会の概要報告である。なお、今年度後半には、T.J. Cheng ウィリアム&メアリーカレッジ教授、T.J. Pempel カリフォルニア大学バークレー校教授、Peter Katzenstein コーネル大学教授が来塾し、同様の研究会を開催する予定である。

(文責 添谷芳秀)

日 時 2007年4月24日(木) 18:00～20:00

場 所 東アジア研究所・第一共同研究室

講 師 Tin-bor Victoria Hui氏(ノートルダム大学政治学部助教授)

演 題 「リベラルピースへの多文化的アプローチ
—中国と欧州の歴史的比較—」

講師のHui助教授は、*War and State Formation in Ancient China and Early Modern Europe* (Cambridge University Press, 2005)の出版によって、一躍国際的に注目集めた研究者である。今回の研究会では、同書の研究成果に基づいて、中国を一元的に権威主義国家としてみなすことの誤りと危険性を強調する、興味深い報告がなされた。

そもそも「中国」とは、「中央の国家(複数) = central states」のことであったという指摘から始まり、中国の歴史とは王朝のサイクルではなく、むしろ多国間システムのサイクルとして理解されるべきであるという歴史的考察が披露された。そして多国間システムとして中国の歴史には、共和制、国際法、国際貿易というカントの恒久平和論の主要な要素がすでに存在していたという分析が提示された。

参加者からは、Hui助教授の考察に基づけば、共産党一党支配下の中国や、台湾やチベットに対する中国の対応はどう理解すべきか、という厳しい質問も出た。そこには、中国研究をより普遍的文脈に位置づけようとするHui助教授の分析アプローチと、中国を特殊な大国としてみなそうとする衝動との葛藤が現れていた。

日 時 2007年5月22日(火) 18:00～20:00
場 所 東アジア研究所・第一共同研究室
講 師 Jacques E. Hymans氏
(スミスカレッジ政治学部准教授)
演 題 「北朝鮮核拡散の心理学」

Jacques Hymans 准教授は、*The Psychology of Nuclear Proliferation: Identity, Emotions, and Foreign Policy* (Cambridge University Press, 2006) によって、国際的な注目を集めている核拡散問題の専門家である。北朝鮮問題には地域研究的アプローチを許さない困難がつきまとうゆえ、北朝鮮の核開発問題に徹底した理論的立場から切り込もうとする報告であった。

まず、冷戦の崩壊という国際政治構造変動に注目し、北朝鮮の核開発能力を所与とする従来の見方に対する疑問が提示され、核開発の意図は必ずしも合理的選択として説明できないのではないかという指摘がなされた。そして、多くの指導者は核開発を慎むものであり、それはむしろ「革命的な決定」であるとされ、その決定には「敵対的ナショナリズム」が作用しており、そこでは「恐怖や尊厳」といった心理が最も重要な役割を果たすことが主張された。その上で、であれば北朝鮮による核開発の意図は冷戦構造の崩壊とは無関係にそれ以前から存在していたはずである、という重要な論点が提起された。

参加者からは、意図と実際の決定をどのように区別するのか、大国と小国との間では理論の説明能力は異なるのではないか、等の質問が出され、活発な意見交換が続いた。

日 時 2007年6月19日(火) 18:00～20:00
場 所 東アジア研究所・第一共同研究室
講 師 Elizabeth Anne Wishnick氏
(モントクレア州立大学政治学部准教授)
演 題 「日中関係におけるグローバリゼーションと環境リスク」

Elizabeth Wishnick 准教授の報告は、酸性雨、黄砂、温室効果ガス排出、エネルギー問題等、中国の台頭にもなる環境リスクを取り上げたものであり、多くの参加者の興味をひいた。まず報告は、これらの諸問題を「脅威」と捉えるのではなく、「リスク」として定義すべきことを唱えた。「リスク」とは、経済的技術的決定の意図せざる結果であって、それは国際政治学のいう「非伝

統的安全保障問題」に属する。それは、しばしば伝統的な安全保障の領域で語られる「脅威」とは区別されるべきであって、リスクとして認識されれば国家間の協調行動の対象となるべきことが理解されるという、重要な指摘がなされた。

したがって、日中間で経済界やNGO等市民社会の領域において、重要な環境協力が進んでいるのはむしろ当然であり、Wishnick准教授は、「リスク共同体」における日本のNGOや市民社会の役割は、実は日本の重要なソフトパワーとして機能していることを論じた。日本の国家主義的な反中アプローチが、日本の重要な外交資源を自ら損なっている様子を浮き彫りにした報告でもあった。

出版

- ①東アジア研究所講座『東アジアの近代と日本』
(2007年9月29日刊行、慶應義塾大学出版会)
2006年度開講「東アジア研究所講座」講義録。
- ②東アジア研究所叢書『日中戦争とイスラーム』
(2008年3月25日刊行、慶應義塾大学出版会)
2002～2003年度の2年間に渡る、高橋産業経済研究財団の助成による研究プロジェクト『近代日本のイスラーム政策とアジア主義』(研究代表者:坂本勉文学部教授)の研究成果を東アジア研究所叢書として出版。
- ③東アジア研究所叢書『東アジアの電子ネットワーク戦略』(2008年3月31日刊行、慶應義塾大学出版会)
2001～2002年度の2年間に渡る、高橋産業経済研究財団の助成による研究プロジェクト『アジア・太平洋地域におけるインターネットの普及とその政治社会・文化的影響—電子ネットワーク社会のインフォミドル形成と市民社会形成』(研究代表者:関根政美法学部教授)の研究成果を東アジア研究所叢書として出版。

慶應義塾大学東アジア研究所ニューズレター No.9
2008年3月31日発行
慶應義塾大学東アジア研究所
発行人 添谷 芳秀
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
電話 (03) 5427-1598
<http://www.kieas.keio.ac.jp/>